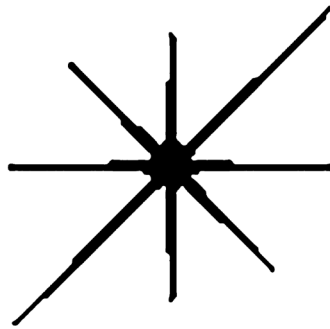


コミット通信 35

[23年6月号特別付録(1)]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

変声譚 5

中村邦生

19 石がおぼえていること

1958年（昭和33年）7月31日、午後3時18分、作家KNの出会った小さな丸石が、かく語る。

——聞こえる、聞こえる。きみの呼び声は、届いているよ。まだ、しっかりおぼえていたんだね？あのころの多摩川駅は、調布から分岐した京王多摩川線の頭端式の終着駅だった。夏になると、駅前から海水浴場を思わせる賑わいの雰囲気があり、川辺に着けば海の家のような食事処が並び、どこもカキ氷の職が立っていた

その日、きみは一人で多摩川に泳ぎに行った。理由をほのかに私は察している。きみは小学校六年生、杉並区立久我山母子ホームの少年グループのなかで、年長者と下級生にはさまれてしばしば葛藤状態に陥った。息苦しい軋轢から、逃れたかったのだ。母親にも姉にも、仲間にも内緒の行動だった。年長者との折り合いのつけかたも苦労したが、意外にやっかいなのは年齢の近い年下の少年たちだった。

夏休みに入って間もない時期で、働きに出ている母親たちの目の届かない不埒な行動が続いていた。きみは前の日に三鷹の牟礼の農家から卵を盗み出す集団行動に失敗した。鶏小屋から、一人につき4個以上くすねてくることがノルマだったが、きみは取り損ね、あえて暗黙のルールを破って、裏庭の物置の出荷棚のほうから盗んだ。リーダーの高校生の怒りをかったが、その説明にはもっともらしい理屈があった。

数は3個だけなのは仕方ないとしても、鶏小屋からじかにいただくなら、いわゆる「おすそ分け」にあずかるにすぎないけれど、すでに商品として並べられた出荷棚から取ってくるとなると、「どろぼう」なんだ。第一、卵がきちんと並べたケースから消えたとなれば、ばれやすいぞ。

どっちだってどろぼうなのは同じでしょ、どうせおれたちはそろって少年院行きだ、ときみが笑いながらいったとたん、年長者に媚を売る示威行動から、年下の少年二人がきみの横っ面を殴りかかり、股間に蹴りをいれてきた。これはいつものことで、反撃するとかえって痛い目にあう。ペナルティが下され、単独行動で卵を8個とってこいとなった。しかし、翌日きみは自転車で家を出たが、牟礼の農家を素通りして、東京天文台に寄り深大寺へ向かった。

夕方近く母子ホームに帰りつくと、少年たちが玄関ホールに正座をさせられ、熊本の女学校教員の経歴を持つ寮母の説教の最中だった。夜になって、きみは母親からいきさつを伝え聞いた。その日も、仲間たちは卵をくすねに出かけたのだが、農家の老夫婦に見つかってしまった。素性を白状すると、囚人護送のようにトラックに乗せられ、ホームに戻ってきた。驚愕した寮母が、盗んだ卵を市価の3倍の値段で買い取る交渉をして、かろうじて警察沙汰になるのを防いだ。ついでに久我山駅近くの食料品店に出向き、高校生の売りに来た卵は盗品だと告げ、こちらは2倍の価格で買い戻した。おかげでどの家族もしばらく卵料理ばかりが続くことになった。

偶然と誤解が幸いして、きみだけが泥棒団に加わっていないことになり、寮母に褒められる結果になったが、安堵どころか屈辱感が体の奥から這い上がってくる思いだった。そうだったよね？前日のきみのルール違反が、盗みの発覚につながっているはずで、それだからこそ良い子とみなされるこ

とに、きみは深い孤立感を覚えたのだ。どうしてこんなところで暮らさなければならないのか、いつまで貧乏生活が続くのか、暗鬱な気分沈むばかりだった。

きみが京王多摩川に泳ぎに来たのは、ちょうどそのようなときだった。本当は海を見にいきたかったが、電車賃が大幅に足りない。井の頭線から京王線への乗り継ぎも明大前経由だと料金がかかるので、母子ホームから千歳鳥山駅まで歩いた。母と姉が仕事に出かけた後、残りご飯をかき集め、おかか入りの握り飯を二つ作った。握り飯は昼になる前に消え、食べ終えてしまうと食欲がいっそう刺戟され、かえって空腹を覚えた。

きみは泳ぎが得意でない。浅瀬に足を踏み入れて歩き始めたとき、予想外に勢いのある流れに体のバランスを崩し、あわてて岩にしがみついた。細流の先には深い淵があり、渦をまいているのがわかった。

川を上がって、土手脇の木陰で身を横たえていると、のぞき込む顔がある。クラスメートの福田君が、なんでここにいるの、という驚きの声をかけてきた。泳ぎたくなつたんで、なんとなく一人で来た、と見上げた姿勢のまま答えると、福田君は不思議そうな表情で隣の木の下で休んでいる父親と妹を紹介した。一人で来たのかい、と父親からも同じことをたずねられた。羽田空港勤務のこの人は、かつて中島飛行機の技師だった。「零戦」だけでなく艦上攻撃機の「天山」とか夜間戦闘機の「月光」とか、福田君が太平洋戦争中の飛行機にめっぽう詳しいのは、そうした背景があった。きみは父親を間近にして、眩しいものを目にする気分ですっと緊張していた。

福田君たちは昼食を終えたところで、上流の釣り場まで様子を見に行くことに決めた。きみはしばらく荷物の番をする役割を引き受けた。それほど遠い距離でもなさそうだったが、ひもじくて歩く自信がなかったのだ。ここできみは、困ったものが目に入った。妹のリュックサックに東鳩のABCビスケットの袋が覗いている。封が切つてあるようだ。

きみは目を閉じてこらえ、また目を開けて青空を見た。一切れ、白い雲が動いている。空も雲も腹が減ることがあるのだろうか。つまらないことを考えてしまった、と幼い子のような連想を恥じて、きみは深く溜息をつく。しかし我慢も限界に達して、薄緑のリュックサックに右手を伸ばす。卵を盗んだときに似て、ひとたび動きを開始すれば、指はすばやく作業を進める。きみは、ビスケットを一つ口に入れて、呑み込む。二つ目はしっかり味わい、ABCビスケットがこれほど香ばしく甘いものだったかと初めて知る思いだった。十枚ほど食べたところで、空腹感よりも自責の念が迫り上がってきた。

ふたたび仰向けに横たわっていると、福田君、父親の顔が現われた。小学3年生くらいだったろうか、妹は無言のままシートの際に坐り、三つ編みの髪を左手で直した。きみはその仕草を見た瞬間、告白の心の負担などはまったく関係なく、勝手に言葉が口から飛び出した。あの一、すいません、そのリュックにあったビスケット、少しもらってしまいました、おいしかったです、ごめんなさい。

父親に驚いた様子はなく、娘に向かって手話で何かを伝えた。娘も手話で応じ、きみに微笑みかけた。あどけなさを残す、大きな目と小ぶりの丸い鼻は福田君に似ていた。女の子は薄緑のリュックサックを手探りし、もう一つ未開封のABCビスケットの小袋をきみに手渡した。どうぞって言うてるよ、と福田君が妹の通訳をしたときには、きみはすでにお菓子をしっかりと手にしていた。

二学期が始まっても、きみは福田君と特別に仲良しになったわけではない。多摩川で会ったことも話題にならなかった。当時としては珍しく、福田君は私立中学に進み、そのまま疎遠になった。何年もたったころ、福田君のお母さんは、彼が中学生になった五月の黄金週間の終わり、飯田橋の厚生年金病院で亡くなったことを人づてに知った。

午後のまだ陽の高い時間だったが、きみは家族たちに別れを告げ、早めに帰ることにした。京王多摩川駅はまだ人がまばらだった。当時は3両編成、先頭の辺りで電車の到着を待った。垣根に咲く薄いピンク色のむくげの花から線路に視線を移したとき、枕木の間のひとつの小石に目にとまった。ごくありふれた灰色の丸石で、特徴と言えば土星の輪のような白っぽい縞模様が細く浮いていることくらいだった。

きみの思いはふしぎな揺れ方をして、この瞬間の、この場所の、この石との出会いを一生忘れない、となぜか自分に強く言い聞かせた。いまもしも世界が消滅したとしたら、この灰色の丸石が最後の記憶になるだろう。

まだ十二歳なのに、胸苦しい孤独感と憂悶、そして空腹感に耐えていた少年が、なぜそんな石に魅入られたのか、説明はつかない。石に願いを託したり、祈ったりしたわけでもない。しかし、何かが起こったのだ。何が？ ただ言えるのは、どこにでもある、ごく普通の灰色の丸石が、この世の無二の存在として、そのとききみには感じられたということだ。

きみの石への強い凝視が幸運な相互作用のようなものを生んだとも言えるだろうか。ありふれた石なのに、めずらかな記憶がこうして残っているのだから。きみがそうであるように、わたしもきみのことを忘れてはいない。あれから65年、きみはまだ孤独感と憂悶を抱え、ひもじい思いの日々を送っているだろうか。そうでないことを願うが。

わたしか？ 記憶をたどってみれば、京王多摩川駅がまだ多摩川原たまたがわらえき駅という名で、砂利運搬用の駅だったころ、河床にころがっていたようだ。そこから運ばれ、移動をくりかえした。ところが、いまだどこにいるのか、それが分らない。海辺の近くの広い造成地で遊具に群がる人々の歓声からすれば、あそこかなとは推測するけどはっきりしない。

再会など望むべくもないが、また呼びかけてみればいい。きみが覚えている限り、わたしはいつだって存在しているはずだから。

20 チンパンジーの時代

S 図書館で作家 KN のレクチャーを聞いたグラフィック・デザイナー Y 子が、かく語る。

——せっかく教えていただいたのに、まったく役に立ちませんでした。ちゃんと覚えていたので、ためしてみたんですけど。もう2年くらい前になりますね。何のことって？ 読書講座の「愛、その実相と虚相」でおっしゃっていた話です。

親しく付き合っている相手への愛の確かさを知るには、その人がどのような子どもであったか、関心を持っているかどうかで判断が可能ということでした。どんな少年だったか、どんな少女だったか、愛する者ならごく自然に知りたいと思うもので、まったくそのことに無関心なら、先行きは見込めない関係だから、さっさと別れた方がいいって、たしかにそういうお話でした。記憶にないんですか？ はい、そうです、おっしゃるとおり、「とても役に立つ立派な愛の真実」を話してくださいました。

それをふいに思い出して、好きになった人にたずねてみたんです。仕事の関係から知り合ったフリーライターで、私より二つ年上の30歳です。それで、彼がどんな子ども時代を送ったのか、とても知りたくて聞いたんです。これって、愛している証拠ですよ。きっと、私のことも聞いてくれるだろうなと期待したし。だから、たずねてみました。

あなたは、どんな子どもでしたか？ 少年だったころの話、わたし、とても知りたいなーと思っています。

それで、あの人が、何て答えたと思いますか？ 笑顔でこちらを見るので、ワクワクして答えを待ちました。そうしたら、ぼくの幼年時代には秘密があるんだというので、何かまずい質問だったかなと思いつつも、どんなことだろうかと、こんどはドキドキです。しかもこれを告白するのは、君が初めてなんだとささやくので、ますますドキドキです。あの人が、もっともらしい口調で、こんなことを言ったんです。

ぼくはね、幼いころ、実はチンパンジーだったのさ、だから思い出せることは、すべて熱帯アフリカのうっそうとしたジャングルのなかの生活なんだ、毛むくじゃらの体で、食べ物をさがして木から木へと飛びまわる暮らしを来る日も来る日もしてね、そんな森のなかのチンパンジーの時代の日々をあれこれ思い出せれば、辛いことも楽しいことも、いやー、なにかも懐かしいな。

そう言って、手で胸のあたりをポリポリかくんですよ。ちょっと、Nさん、笑わないでいただけますか。おかしくなってないですよ。いったい、これって、何だったのでしょうか。それからあの人が、わざとらしく真面目な顔をして、あなたはどのような女の子でしたかって、聞いてきたんです。もうばかばかしくて、大きなため息をつきました。どうにも答えようがないじゃありませんか。

愛の確かさとか、愛の証拠だとか、ぜんぜん関係ないです。そんなこと、知るもんですか。わたし、涙が出てきちゃったんです。そうしたら、あの人が、囁き声でわざとらしく何を言ったと思いますか？ あなたは、きっと、かわいいウサギさんだったかな、ですって。くだらないゲームに誘っているつもりかもしれないけど、バカじゃないですか、この男。これほど幼稚だと思いませんでした。何がかわいいウサギさんですか。はい？ 今なんておっしゃいました？ その元チンパンジーだった男、なかなかおもしろいやつじゃないかですって？ まさか、えー、本当にそう思われます？ からかわないでくれますか。

でも、正直言うと、あー、やだやだ、どう言ったらいいのか、確かにこんなバカ男でも、とても悔しいけど、嫌いにはなれないんですよ。いやですね。この気持ちのよじれ、何とかしてくださいよ。少しは責任を感じてもいいのじゃありませんか？

そうですか、そんな言葉があるんですね。ちょっと書きとめますから、もう一度おしえてください。読書講座でも紹介があったのですか。すいません、そっちのことは、覚えていません。シェイクスピアのソネットの141番の歌ですね。

ほんとうは、目でお前を愛しているのではない
目はお前のたくさんの欠点をみている。
しかし心は目が軽蔑するものを愛しているのだ。
心は見えるものにさからって、やみくもに愛をささげてしまう。

ぐさりとくる言葉ですね。なるほど、そうかもしれません。「心は目が軽蔑するものを愛している」って、私の恋はいつもこればかりですから。スパゲッティ・ミートソースを口のまわりにたっぷりつけてほおばり、それでも平気でまたフォークにぐるぐる巻きつけてがつがつ食べる年下の男と付き合い合ったこともありますけど、目はそのみっともない姿を軽蔑していたのに、心は逆らって愛していましたから。えっ、そのミートソース君はどうしたのか？ そんなこと聞かないでくださいよ。

えーと、それで、この歌のことですけど、理解はできるのですが、今度の元チンパンジーの彼氏の場合に当てはめると、何だかとても大げさな気がします。だって、かわいいウサギさんだったかなと言われたとき、いいえ、残念でした、ハリネズミでしたって答えたとすれば、話に弾みがついて何か

が先に進んだかもしれないですから。はい、私だってわかっているんですよ、そんなふうに N さんに指摘されなくても。

要するに、おおげさんです。何もかも、すべてが大げさんです。いっさいがっさいが大げさなことに思えてきました。妙ですね、こだわりの縮尺を変えてみたら、気持ちがふんわり楽になってきた感じです。話を聞いていただいて、ありがとうございます。

ところで、あなたはどんな少女でしたか？ えっ、その質問、いまここでするなんて何だか嫌味にも聞こえますけど、まあ、いいです。本気で知りたいですか？ じゃ、せっかくなのでお答えしますね。はい、私は昔も今も物忘れの得意なハリネズミのプルプルです。はい、そうです。二宮由紀子のお話に出てくるプルプル。まあ、おっしゃるとおりプルプルはオスです。でも、そんなことどうでもいいじゃないですか。

21 闇の奥へ、もっと奥へ

埼玉県 S 市の元公務員（書記官）の M 氏が、かく語る。

——長野の伊那山中で生まれ育った者にとっては、暗闇など恐れに足らず。闇が深さを増すほど清浄な空気を肌を感じるくらい親しいのです。それこそ森の暗い夜道を歩くにしても、慣れてしまえば、目に貼りつくような濃い闇も何か不思議な清気が身を包んでいると思えます。

そこで、聞き及ぶところ、進むにも戻るにも人をまどわす魑魅魍魎ちみもうりょうがあちらこちらに出没する、いわば難攻不落の迷路があって、果敢に進んだあげく、斃たおれた者たちが数知れないとか。

それならば、闇の道を進むことにかけては、おおいに自負がある私が挑むことにする。決戦と言ってしまっただけは大げさだろうし、鉢巻までして血気盛んにおのれを鼓舞することはないだろうが、今は夜の 10 時を過ぎたところ、まず風呂に入って身ぎれいにし、心して取り組むことにしよう。

折よく、時期は熟した。先月末で定年を迎え、退職金を活用する好機の到来なのだ。簡単に言えば、住宅ローンの残額をいよいよ繰り上げ返済して、まさしくきれいさっぱりな身になろうと決意したわけである。それが全部パソコンで処理できるとは、何と便利な世の中になったものだ。そう思うところまでは、誰しも共通の感慨で、ここで早くも地獄の一丁目への入口に立っていることになるらしい。いよいよ闇の王との前哨戦だ。王なる者がいるかどうか知らないが。

住宅資金を借りたのは M 銀行。その私名義の口座に返済金額以上の金が入れば、返済手続きが簡単にできるそうなのだ。

普通預金のメインバンクは埼玉 S 銀行、それから普通預金で最も金利の高い A 銀行、それから先の返済口座のある M 銀行の 3 口座を私は持っている。だから、二つの銀行から M 銀行へ返済可能の金額を移せばいい。

では、実行する。まず、メインの S 銀行から始める。ここから、難攻不落の現実を予期していたし、何よりもパソコンでの手続きは暗黒の迷路に足を踏み入れることに等しいので、職場の後輩にアイコンを作ってもらっていた。そこから入れば、ログイン画面がパソコン上に見られるはずだ。ただし、一度説明を受けただけだし、これまでも未使用となれば、心もとない感じはあるが、ここで弱みを見せてしまうと、どこで闇討ちにあうかわからない。とにかく前進あるのみ、とアイコンをクリックする。

「調整のためお取引の連絡ができなくなりました。しばらくして、あらためてお取引願います。なお、お急ぎの場合は本サービスのお問合せ窓口へご照会下さい。」

おう、さっそく来たか。案内係のふりをしているが、こいつは化け物だ。何しろ、言っていることの意味が解らない。ここで追い返すつもりだろうか。

問い合わせるにも、今は夜の11時50分だ。おや、もうこんな時間か。何をもたもたしていたのか。まだ魔境に入っているわけでもないだろうに。たとえ、問い合わせても、説明が理解できるとは思えないし、別の罠に誘い込む企みかもしれない。ともかくログインできればいいわけなので、ネットで「M銀行」を検索する。

ホームページが出てきた。真面目そうな雰囲気だが、念入りに目を凝らし魑魅が潜んでないか点検する。キャンペーンとか デビットカードとかの亡霊めいた説明がたくさん書いてある。しかし、どこにログインをするところがあるか、容易にわからない。もっともらしく「AIチャットに質問」なるものがあつたが、これこそ限りなく怪しい。

弱音を吐くのは早い、何やら迷路の闇が深くなり始めている。こんなところで、あえなく敗走などしたくない。子どものときから、闇の道を行くのは誰よりも鍛えてきたはずではないか。とにかく、「AIチャットに質問」は、これもわけがわからないのでパスする。

どこだどこだと、弱り目を酷使してひたすら探す。なんと、右上の端に小さく「ログイン」とあるのを発見。化け物屋敷じゃあるまいし、こんなところに隠れていやがって、通りすがりに人を脅かそうっていう魂胆だな。ここで恐れるわけにはいかない。ならば、素直にクリック。怖気づいては、迷路の暗黒世界との戦いは終わらない。

なんだ、これは？ ログイン画面ではない。

- ・インターネットバンキングはこちらへ
- ・法人のお客様はこちらへ
- ・デビット専用はこちらへ

3つの入口が現われたが、開ければどれも最初は人を安心させる明るい階段で誘うが、足を踏み入れたとたん扉が閉まり、すぐさま闇の奥へ連れ去られ、緊縛状態で責苦にあうに決まっているのだ。あいにく私にはそのような縛りの趣味はない。一度くらい経験してみるかと思わないこともないが。とにかく、私は「法人」など無縁だ。「邦人」と問われれば、日本国のパスポートを所持しているのだから、それなりに資格はあるだろうが、ここで外国籍の人間を排除するのは考えにくい。「庖人」の誤記と判断しても、庖丁一本をさらしに巻いて板場の修行に出る古い歌謡曲で唄われるような健気な料理人でもないし、「封人」という「国境を守る人」の意味の言葉もあるが、これでは条件を限定しすぎだ。「修行を積んで成就した完全にして理想的な仏のあり方」とされる「報身」では、なおさらハードルが高すぎるし、そんな超絶的な存在を暗黒のバンク・キャッスルが招き入れるはずはない。

ならば、デビットか。いや、そんな名前の人物は知らないし、関わると付きまとうしつこくて、短慮短気のタイプのやつかもしれない。名前からそう感じる。太郎と同じだ。とくに判断の根拠はない。けれど、私の経験的な勘では、物事全般にわたって、根拠が希薄か、あるいは根拠なしの判断のほうが、妥当な結果を得ることが多い。したがって、デビットはおさばらする。

残るは、インターネットバンキングだ。残り少ない毛髪ながら精いっぱい体毛を動員して、総毛立つ思いで、いざクリックしようとしたら、何と消えてしまった。画面は元のページに戻っている。もう一度試みたが、同じ結果だ。なるほど、これが敵のやり方か。迷路に誘いこんで、さんざんエネルギーを使わせて、また入り口に戻す。これは永劫回帰の闇の迷宮なのか。じっとしていると、時間ばかりたつ。もう2時31分か。まいったな。背後から闇が黒々と迫ってくる感だ。告白すれば、子どもの頃から、前方の闇にはめっぽう強いが、背後から襲ってくるやつは苦手なのだ。

心を落ち着けて、再考する。ふいに単純な事実に気づいた。スピードだ。手の動きの遅さが、支障をきたしているちがいない。この闇の世界は、鈍手、鈍足では対抗できないのだ。速さこそ、必須の能力なのだ。足は自信がないが、手には長年の職業的な修練の蓄積がある。何しろ書記官として、速記で一家五人の生計を支えてきたのだから。

とにかく「ログイン」をクリックしたのだから、ごく当然の常識として、その程度の常識がこんな不条理な迷路の闇世界でも通じるとしてだが、何とかログイン画面には行けるはずだ。今度は消える時間を与えないように、高速でカーソルを動かしてインターネットバンキングが逃げ去る前に捕捉しないといけない。こんなところで愚劣な流行語タイパ（タイムパフォーマンス）が問題になるとは思わなかった。タイパなどと言う連中は、みんな闇の世界に内通した手足自慢のアスリートみたいな者なのだろう。さて、どうだ、おや、どこに消えた。間に合わなかったか。この迷宮は、追っ手を攪乱するための秘密の穴がいたるところにあるのかもしれない。さすがに、気力が失せてきた。もう、3時14分。しかし、ここで退却は痛恨の極みだ。

では、最初から余計な情報に頼らず挑むしかないだろう。

ログインIDまたは店番号（3桁）口座番号（7桁）を打ちこめば済むのだったな。そしてログインパスワードを入れる。これでいいのか？ この不安が迷宮世界では落とし穴なのだ。こうなるとひたすら根気力の左右する戦いだ。それからログインパスワードのところにパスワードを入れる。その上に「ソフトウェアキーボードを利用する」と書いてあったが、何のことかよくわからない。混乱を仕掛ける罠かもしれないので、無視して直接入力する。慎重にパスワードが間違いないか確認してログインをクリックする。何だ、何だ、エラーと出た。もう一度打ち直してみたがやはりエラーと出る。一体どういうことだ。責任者を出せ、と言いたいところだが、誰も責任者の正体はわからないだろう。

仕方なく「エラーが出る場合」というところをクリックする。くどくどと説明があって、うんざりするが、他に方法がないので読んでみると「安全のためにはソフトウェアキーボードの利用が推奨」されていて、その後小さくソフトウェアキーボードを利用しない場合は「ソフトウェアキーボードを利用する」の文言の左の四角のマークを外すとある。ややこしい。元の画面に戻りたいが、これがまた戻るのが簡単にかない。ようやく行き着くと四角にレが入っていた。そうか、つまりこれを外さないと直接入力すると必ずエラーになるのだ。

敵の遣り口がだいぶ分かってきた。回り道からさらに回り道に誘って、気力を削ぐのだ。負けてはならない、それいけ、と気合をこめてクリックし直接入力したところ、やっと口座の画面になった。さて、どうやってそこから振り込むか、しばらく呆然としていたが、よく見ると小さく「この口座から振り込む」というところがあるので、クリックする。すると「新規先へお振り込みの場合という」のがあったので、それをクリックすると「新規お振り込み先を指定する」という画面が出て、その下に「この手続きにはワンタイムパスワードが必須です」とある。何だいこれは。また、新たな闇の入口に誘ったなと腹が立つ。しかし、怒っては敵の思うつぼなので、気を取り直して「ワンタイムパスワード利用の流れ」と書いてあるところをクリックする。どうやら、ここからパソコンとスマホ両方が必要のようだ。まずいな、睡魔が忍び寄ってきた。こいつには勝てない。急ぎコーヒーを飲んで戦いに備える。

では、実行。いや、待て、三つの銀行にそれぞれID・パスワード・取引暗証番号があるわけだが、すべて同じにするのはまずいので、大文字と小文字の組み合わせなど微妙に変えている。それに加えて全銀行にワンタイムパスワードを入れなければならない。今、スマホで検索すると、これは文字どおりワンタイムの10桁くらいの数字で、時間制限もあり、もたもたしているとどんどん変わるので、

注意すべしとの情報がある。

まずは A 銀行から M 銀行の口座に振り込みたい。支店コード (2 桁)、口座番号 (6 桁) に ID (8 桁)・パスワード (9 桁)・取引暗証 NO (8 桁) を入れて、振り込みに進むにはワンタイムパスワードを取得するアプリをダウンロードしろと指示がある。はい、はい、わかりましたと虚空に向かって呟き、ダウンロード、インストールして進む。まだあった、120 秒以内に登録してある自宅の固定電話から、指示された番号へ電話をかけなければならないのか。自動音声の応答の気持ち悪さは仕方ない。まだ迷路は続く。今度はメールに URL が届き、そこにある番号 (8 桁) をワンタイムパスワードの画面に入れなければならないのだ。やっとワンタイムパスワードが出てきたので、それを入れたものの、番号を間違えた。どこの番号が違うのか。再度、試みる。また違うらしい。どこが？ 0 を 6 に見間違えたか。

さすがに、まいった。闇はどんどん濃くなっていく。こういう複雑極まる闇の深い行程を 3 つの銀行で 3 回行き来するの。三つの迷宮を往復するにも、微妙に違うパスワードや長々した数字へのすばやい対応、これじゃ混乱し行き惑うのは当たり前だ。不覚だったか。永久に逃れられないラビリンスに入り込んでしまった。

この闇の世界に君臨している者が誰か知らないが、ハート・オブ・ダークネスのあのコンゴ川上流の狂人のように、本人自ら「怖ろしい、怖ろしい」とか、「地獄だ、地獄だ」と呻いているだろうか。いや、そんな生身を思わせる治者などいないのだ。かといって、空無の実体が支配しているとなれば、語義矛盾だ。いや、案外そうかも知れない。そうなれば、ほとんど仮想空間に等しいことになるだろうか。そんなことに挑む者は愚者に他ならない。

いや、何が何だかわからなくなってきた。酷い目にあいながらも、すこし間を置くと、ふたたび繰り上げ返済のインターネット手続きに挑むかと、殊勝な思いが動き出す。それにしても心身の奥の方から蠢く、倒錯した意欲のようなもの。この正体は何だろう。我ながら、不気味だ。

今度は埼玉 S 銀行から M 銀行に金を移すことをしてみるか。

支店コード (2 桁)、口座番号 (6 桁) に ID (8 桁)・パスワード (9 桁)・取引暗証 NO (8 桁) を入れて、ワンタイムパスワードを取得するアプリをダウンロードして、インストール、120 秒以内に登録してある自宅の固定電話、指示された番号へ電話、メールに URL、番号 (8 桁) をワンタイムパスワードの画面に……、何だ、何だ、闇が膨らみ、広がり、渦巻き、また膨らみ、広がり、渦を巻く、これはいったいどこから湧き出したものだろう。私の心身の奥深い暗がりからだろうか。

まさか？ いや、わからない。手に鉄の文鎮を握っているが、何をするつもりだ？ 私は狂ったのか。そう、やるがいい。叩け、叩け、もう一度、強く叩くの。おや、モニターはガラスでなかったか。もっと粉々に碎けるかと思ったが、それでもこのプラスチック板の歪み方は、痛快なほど醜い。おや、パソコンはいかれてもサブモニターはまだ生きている。ジージー、ジージー、白々した細かい波形の光の痙攣がホワイトノイズを発生している。何やら懐かしくもある。かつてテレビが一日の放映を終えると、日の丸の旗めくなかに君が代が流れ、そのあと唐突にホワイトノイズの画面に切り替わった。

窓の外はまだ薄闇だが、夜明けが近いのだろうか。いま、5 時 22 分。新聞配達バイクが動き出している。私は生還したのか。いったいどこから。

納得できることは、何もない。繰り上げ返済の「繰り上げ」には、「繰り引き」と同義で、「軍勢を引き上げる」の意味があるらしい。私は「軍勢」など、引き連れてはいなかったが、闇との戦いの終わりを含意するとなれば、何たる皮肉か。

朝刊が届いた。いつものとおり、今日の運勢欄を開けてみる。亥年には、「力の空費多し。尋常の

勝負の大切さを知れ。目の前の一事を理解するところから始めれば吉日なり」とある。結局は、今日も戦えということか？

22 こんな犬の話は、お気に召さないかもしれません。

現代日本文学の韓国人研究者・キムジスク（金智淑）が、かく語る。

——犬ですか？ はい、ヨークシャーテリアを飼っています。もうすっかりおじいちゃん、目がよく見えません。名前はポピーです。韓国でだいぶ前にトイレトペーパーのコマーシャルがあったのですが、「うちのワンちゃんはポピーです」って、とてもかわいい犬が登場していたので、まねしてつけました。

犬の話がお好きなんですね。では、韓国のこんな話題はどうでしょう。お気に召さないかもしれませんが、このまま続けていいですか？

父方のハラボジから聞いた実話です。ハラボジって、韓国語で祖父のことです。その祖父の住んでいた場所はチュンチョンナンドで、忠清南道と書きます。ソウルの南東の地域ですが、山の小さな村の農家でした。とにかく田舎ですから、犬肉はとても大切な食材でした。いえ、そのころは田舎じゃなくても、都会の人だってよく食べましたよ。オリンピックまでは、ソウルのノリャンジンの市場なんかに行けば、安く手に入りました。わたしは、食べた経験がありませんけど。

祖父はキムビョンスと言います。ビョンスおじいちゃんは、二種類の犬の飼い方をしていました。庭で綱をつけて、要するに番犬として飼う犬、もうひとつはフェンスで囲って、食用として育てる犬です。床に綱を張って、糞尿が下に落ちるようになっています。ほとんどが雑種犬で、もちろん名前なんか付けません。

食べごろの成犬になると、叩き殺します。しっかり叩いて、肉質がやわらかくなったところで、丸焼きにするか塩茹でにして、いただくわけです。

ところが、あるときこんな事件があったそうです。日本の柴犬みたいな毛色だったので、なんとなく黄色犬という意味で、「ヌロンイ」と名づけた犬を食用に育てていたそうです。隣の家のファンマンシクというおじいさんも、同じ目的で犬を飼っていました。

そのうちいよいよ犬を殺して食べる時期になりました。これって、日本語で何と言いましたっけ？ ホフル？ ああ、「屠る」ですね。さすがにそれぞれ犬に情が移っていますから、飼い主の気持ちの負担が大きい。そこでうちのおじいちゃんと隣のマンシクおじいちゃんは、こうした場合よくあることですが、犬を交換したのです。

マンシクおじいさんは、ヌロンイに特別な思いはなくて、ただ早く料理にありつこうと、ほどよく叩いたところで、犬を火にかけました。ところが、叩き方が足りなかったのか、炎が背から腹に回り始めた瞬間、ヌロンイは身を震わせながら起き上がり、山の中に走り去ってしまったのです。マンシクおじいさんは、驚いた拍子に薪につまずいて、火のなかに倒れ込んでしまいました。呪いの叫び声を上げながら、井戸水を頭からかぶり、何とか両腕と左耳の火傷だけですんだのですが、犬に逃げられたことをひどく悔しがりました。そして、弁償はどうするつもりだと、うちのおじいさんに迫ったのです。

犬は山に消えたまま、3日たっても気配を消しています。体を叩かれた上に、火傷までしているはずだから、どこかで死んでいるだろうと誰もが思いました。でも、何を根拠に信じているのか、ビョンスおじいさんは、いや、家の近くの山にいて、身を潜めている気がする、と言い張るのでした。

驚いたことに、その予想は当たりました。4日目の朝早く、ビヨンスおじいさんは山に入り、ヌロンイを大声で呼んだのです。呼称の場合、語尾をアにしてヌロンアと呼びかけます。

ヌロンアー、ヌロンアー、ヌロンアー

きっとハラボジの声は樹から樹へと葉をゆらしながら、渡っていったのではないのでしょうか。声は届きました。昼近くになり、ヌロンイは飼い主の呼び声に応えて、藪の中から姿を見せました。背中の毛は焦げ、あばら骨が折れているせいか、胴体がくの字に曲がっていました。それでも小さく尾っぽを振り、右の後ろ足を引きずりながら、こちらに近づいてきたのです。痛々しい姿に、おじいさんはヌロンイを抱き上げようと思いました。ところが、食用犬にとっては、そうした人間のかわいがりなどまったく未知のものです。パニック状態で暴れようとします。吠えてもいいところですが、声も失っていたそうです。おじいさんは仕方なく、幼子のようにゆっくり歩むヌロンイと並んで家に戻りました。

喜んだのはマンシクおじいさんです。さっそく火を起こそうと薪を積み始めました。すると、ビヨンスおじいさんは、こう言いました。

もうこの犬は渡さねえ、見て見ろ、このひん曲がった体、おまえが中途半端なことするからよー、そいでな、この犬はうちで飼うことに決めたんだ、あまり長生きはできないだろうがよ、だから金を払うから、それでいいだろう、いくらだい？ おう、なんだい、高くふっかけたもんだな、長い付き合いだろうが、その半分じゃだめかい？ えっ、金はいらねえって言ったか？ ばかやろう、強がるんじゃねえ、貧乏人のくせしてよ、おれも貧乏だけどさ、だから半分にしとけ、それでいいな。

次の年の春のことです。私のハラボジは煙突の修理をしているときに、屋根から落ちて亡くなってしまいました。地面に横たわった遺体のそばで、ヌロンイはとまどったような様子で坐りこんで、じっと動かなかった、と後で家族から聞きました。

ヌロンイが死んだのは、同じ年の秋です。今は裏山のキム家の墓の隣に埋葬されていて、小さな木の墓標がたっています。その墓標をよく見てみると、なんと薪なんですよ。これに気づいたとき、思わず私は笑ってしまいました。ほんとうは、泣いてもよかったんですけどね。

執筆者について――

中村邦生(なかむらくにお) 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には、『チェーホフの夜』(2009年)、[『転落譚』](#)(2011年)、[『幽明譚』](#)、[『ブラック・ノート抄』](#)(いずれも2022年)などが、批評には、『未完の小島信夫』(共著、2009年)がある。